

# SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

No. 22  
2025.3.20



ホームページはこちらから → <https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>



# うまくいかないときには

本号では、本年度4月より附属学校教育局にご着任された丹治敬之先生にお話を伺います。

先生のこれまでのご経歴を教えてください。

丹治敬之と申します。私は筑波大学大学院博士課程（障害科学）を修了し、障害学生支援室の助教を経て、2014年から10年間、岡山大学で教育・研究に従事し、この春より筑波大学附属学校教育局に着任いたしました。専門は特別支援教育と教育心理学です。

先生のご研究テーマやご専門分野についてお聞かせください。

「子供の初期読み書き発達の認知的要因・環境的要因の解明と早期支援モデルの開発」で、子供の認知・言語発達や文字への興味関心、さらには家庭環境をはじめとするどのような環境的要因が、初期の読み書き発達にどのように影響しているのかを研究しています。その先にはもちろん、読み書きで困っている子供や保護者をエンパワメントする早期支援モデルの開発を目指しています。また、「学習に困難を抱える子供と共に考える多様な学び方の研究」で、子供の読み書きの背景や本人の思いや得意なこと、興味関心に合わせた学習方法を探究しています。さ

らに、応用行動分析学を援用して、人と人・もの間にある「障害」を分析・支援する研究をしています。

現在、多様な教育的ニーズのあるお子さんが増えています。先生のお考えを教えてください。

これまで大学の教育相談や研究、学生指導等を通じて、幅広い年齢や段階の多様な難しさのあるお子さんに接する機会がありました。

一つの例としては、自分が困ったときに周囲に助けをうまく求められない、相談のしかたがよく分からない、という状況がみられます。困りごとを自分一人で抱え込んでしまい、周囲から孤立しがちになるケースもあります。もちろん、この問題は本人の問題だけではなく、そうせざるを得ない状況を生みだしている社会側の問題や、学校・大学との間にある何らかの問題が背景にあることも考えなくてはなりません。

良い意味で周囲に依存する力、人に助けを求めて頼る力が大切なのではないかと考えています。人に依頼する力は経験がある程度積まないと身につけませんし、自己理解も含めて、自立活動の授業等で学

# あえて一歩引き、俯瞰してみることも必要

習する必要があるように感じています。ただし、良い意味で依存したり、困りごとを自分なりに解決するために周囲に調整の必要性を伝えたりするためには、本人の力を伸ばすことだけを考えていては十分ではありません。その人の周りの人たちの理解やサポートが必要不可欠です。

つまり、周囲の人的環境を整える、社会を耕すような視点も大切になります。ピア・サポートやナチュラル・サポートとして、友達同士の中でこのような関係性を構築していく仕組みもありますが、特に発達特性のある方へのサポートは本人が必要を感じないこともあり、なかなかスムーズにはいかない場合も見受けられます。

教育現場で指導にあたられている先生方に、日々の指導の参考になるような手がかりをいただけますか。

私自身は応用行動分析学の考え方から、「出来ないことを子供のせいにはしない、個人に求め過ぎない」ことを心がけています。先生方も日々の教育の中で、思うように子供を指導できないという悩みを抱えることがあるかもしれません。そのようなとき、原因を子供だけに求めるのではなく、子供をとりまく環境との相互作用も考えながら、一歩引いて、まずは俯瞰的に子供との関係を見直してみると良いでしょう。子供と同じ目線に立ち、じっくりと丁寧に本人の気持ちを聞く時間をとり、横並びの対等な関係を作ろうと意識することで子供自身が変わるかもしれません。さらに、子供をしっかりとはめて認めてあげることで、子供の中に自己効力感が育つと思います。

あえて、「一歩引いて、今の指導を俯瞰的にみてみよう」という考え方が、必要なですね。

熱心に指導をしていると、時にはうまくいかない原因を子供に求める場合もあるかもしれません。そのようなときには、周りの先生方に気軽に相談でき



るといいですし、担当の先生が一人でケースを抱え込まないような体制にすることが、学校組織に必要なではないでしょうか。

困ったときに周囲の力を頼りながらより良く解決していく力、これは子供だけではなく、先生方にも必要なことかもしれませんね。校内支援の体制を整えること、外部専門家の活用や、特別支援教育コーディネーターの育成等も今後ますます求められると思います。

社会の変化とともに、学校側も変化が求められているかもしれません。現場の先生方は、本当に一生懸命に子供の教育に携わっていらっしゃると思いますので、自分自身も皆さんと一緒に、今後も日々、研究と教育に邁進していきたいと考えています。

## おわりに

長年、学生への指導に携わっていらっしゃるご経験に基づいて、ご自身の教育への思いを温かな眼差しと穏やかな笑顔で語ってくださいました。丹治先生のご専門分野やご研究テーマのお話は、今後もグループ事業の中で「SNE-T」読者の皆様にお伝えしていく予定です。ご期待ください。

（聞き手：連携推進グループ 竹田恵 橋本時浩）



## 附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取組がたくさんあります。

### 交流及び共同学習の実践から ～特別な存在ではなく、一緒に楽しむ仲間へ～

今号では、附属久里浜特別支援学校の遠藤佑一先生（小学部主事）にお話を伺いました。



まず、先生が特別支援教育の道を目指したきっかけについて教えていただけますか？

私がこの道に進んだきっかけは、さまざまなことが絡んでおり、一概にこれとは言い難いですが、中でも大きなきっかけの一つとなったこととして高校時代の大きなケガと、大学時代のボランティア活動が結びついたことだったと思います。

高校時代はサッカー部に所属し、大学でも続けるつもりでした。しかし、高3の最後の大会直前の練習で大きなケガを負い、手術を担当した医師から「膝に負担がかかる激しい運動は控えた方がいい」と言われました。競技スポーツを諦めざるを得なくなったことで、「何か人と関わる活動をした」と思うようになりました。

大学入学後、さまざまなサークルを見て回る中で、偶然、障害のある方々と関わるボランティアサークルに出会いました。そのサークルについてはとりあえず話だけ聞くなり担当教員の研究室を訪ねたのですが、あれよという間に入部する流れとなり、「じゃあ、入部の希望を部長に伝えといたから」と最後に言われ、そのまま入ることとなりました。進路や進学先の選択でさえ親に相談せずに決めてきた私でしたが、この選択だけは、めずらしく誘いに身を任せて決めた入部だったと思います。（…ち

なみにその先生は安藤隆男先生でした。）

サークルの活動は非常に刺激的でした。そこで関わる方々の障害の種類は多岐にわたり、視覚障害や聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病気による障害など、年齢層も幼児から高齢者まで幅広いものでした。

また、サークルで出会ったサポーターの方々からの誘いを受け、放課後等デイサービスでの支援や少年院に入っている少年たちとの交流、余命宣告を受けた方とのベッドサイド交流、多胎児乳幼児の預かり保育など、サークルの枠を超えたさまざまな活動にも参加しました。これらの活動を通じて、これまで出会ったことのない人々と非常に濃密な時間を過ごし、結果として大学4年間の土日のほとんどをこうした活動に費やしていました。

そうした経験を積む中で、高校でのケガをきっかけに、自分自身が「将来生活に支障が出るかもしれない」と考え、やりたいことを諦めたことを思い出しました。そのとき、私自身が無意識のうちに「障害があること＝辛い人生」と捉えていたことに気がきました。しかし、実際に障害のある方々と関わる中で、それが単純な図式では語れないことを学びました。目の前のことを心から楽しみ、幸せを感じながら生活している人も多く、特に先天的な障害がある人にとっては、障害があること自体が辛いのではなく、社会の制約や偏見による制限の方が辛いのだと理解するようになりました。この実体験を伴った学びが、今の指導観の基礎となっています。

その経験が先生の指導にも大きな影響を与えているのです。先生の関わり方を見ていると、子供たちの反応を見ながら対応を変えているように感じますがそれらの経験はどのように活かされていますか？

そうですね。子供たちは一人一人異なるため、決まった指導法が必ずしも通用するわけではありません。子供の反応を見ながら、どのように関わるのが最適かを常に考えています。



絵の具の特性について学ぶ授業

例えば、「褒め方」一つとっても、一般的な褒め言葉が苦手な子もいます。その場合、ジェスチャーを使ったり、その子の好きな遊びを通じてフィードバックしたりと、別の方法を試します。一人一人の子供に合った関わり方を模索することが重要だと考えています。「褒める」ことで信頼関係が生まれ、次の挑戦への意欲につながると感じています。

これまでの経験やそうした指導方針は、交流及び共同学習にも活かされているのでしょうか？

はい。本校では地域の公立小学校と交流及び共同学習を行っています。詳細は『授業を豊かにする筑波大附属特別支援学校の教材知恵袋 応用・発展編』のColumn9に書かせていただいておりますが、これは、特別支援学校の児童が社会性を育む機会になるだけでなく、交流校の児童にとっても障害についての理解を深める貴重な経験になっていると感じています。

この過程で私が大切にしているのは、「子供たちが感じたことをそのまま受け止めること」です。人の感情は自然と湧いてくるもので、そこに良い悪いはありません。そこに蓋をするような働き掛けはその対象と関わることをストップさせたり、距離を置こうとしたりすることにつながるのではないかと思います。本校の児童と関わる中で、交流校の児童は自分たちとの「違い」を知ることとなります。その中で驚きや戸惑い、時には拒否感を抱くこともあるかもしれませんが、それは自然なことです。



交流校での出前授業



カヤックの体験学習

その感情を否定せず、「なぜそう感じたのか？」と一緒に考え、その感情の原因を正しく理解することが大切だと思っています。その上で、どう関わるかを選択できるよう、適切な材料を提供することが私の役割だと考えています。

そもそも、世の中のすべての人が等しく仲良くしなければならないとは思いません。もちろん、互いに理解し合えるのが理想ですが、誰しも相性の良し悪しはあります。ただ、関係を築く基準が誤解によるものでなければ、それで良いのではないかと考えています。

交流を通じて、子供たちはどのように成長していくのでしょうか？

交流活動の中で、特別支援学校の子供たちは新しい刺激を受け、さまざまな経験を積むことができます。一方で、交流校の子供たちも「障害があるから特別扱いする」のではなく、「どうすれば一緒に活動できるか」を考える機会を得ます。

例えば、自閉症のある子供がいる場合、その子が興味をもつものを活動に取り入れることで、主体的に関わることができます。すると、障害のある子も「特別な配慮を受ける存在」ではなく、「一緒に楽しむ仲間」として受け入れられるようになります。

あるとき、交流校の子供が「この前、一緒に活動した子にまた会いたい!」と言ってくれました。その言葉を聞いたとき、私は「障害の有無を超えて、純粋な関係が築かれている」と実感し、とてもうれしく思いました。

先生の指導方針や交流活動を通じた子供たちの成長について、また、先生の教育に対する熱い思いが伝わってきました。今日は貴重なお話をありがとうございました。

聞き手：連携推進グループ 稲本純子

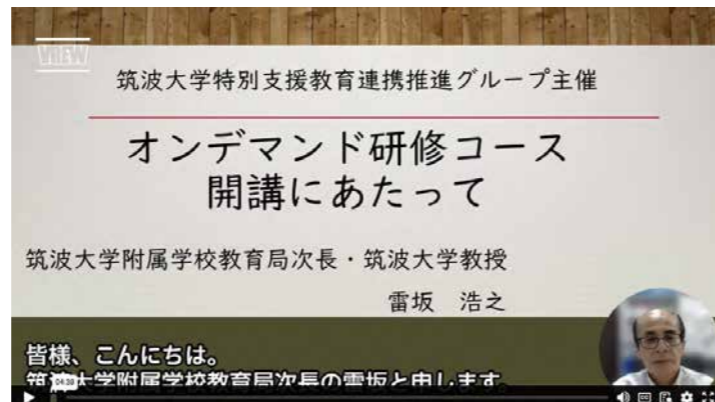
## 令和6年度 オンデマンド研修コースについて

令和6年10月1日(火)～令和7年2月7日(金)の期間に、特別支援教育における指導の専門的知識と、実践力に優れた教員の資質向上を目的として、配信型の研修である「オンデマンド研修コース」を無料にて開講しました。筑波大学附属特別支援学校群、附属学校教育局の協力を得て、様々な場で学ぶ障害のある子供の教育的ニーズに対応した指導等の参考となる32の動画教材を広く公開しました。対象は、幼・小・中・高、特別支援学校の現職の先生方として、学校種・障害種問わず、学校単位で受講登録いただきました。

本年度は全国から532校・機関の先生方にご受講いただきました。配信中はグループのHP上に登録校専用サイトを公開し、研修に関連した情報を提供しました。

受講後のアンケートでは、「実践に活かしやすく専門的な知識を沢山学ぶことができた」「通常の学級にも活かせる情報を得られた」「コンテンツの時間が短い為、授業時間の隙間で受講することができた」等、各コンテンツの具体的な感想を含めて、沢山の意見を頂戴しました。

いただいたアンケートの内容を参考にさせていただき、次年度以降の教員研修事業に活かしてまいります。ご受講いただいた全国の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



【開講にあたって】雷坂浩之先生

## 令和6年度 第2回特別支援教育研究セミナーについて

令和6年度第2回特別支援教育研究セミナーは、「インクルーシブ教育システムの推進に向けて～共に学び・つなぐ・附属特別支援学校の実践より～」をテーマに、1部と2部に分けて開催しました。

第1部は、令和7年2月22日(土)に開催され、附属特別支援学校5校の先生方13名にご協力いただき、対面でのワークショップや教材展示を行いました。全国から36名の先生方が参加しました。参加者からは、「疑似体験等を通じた各障害への理解の深まり」、「ICT活用や各障害への専門的対応に関する学び」、「参加者や講師との交流ができるアットホームな雰囲気」などを高く評価する声が聞かれました。

第2部は、2月17日(月)～3月18日(火)にかけてオンデマンド形式で開催しました。附属特別支援学校5校の先生方の協力のもと、6本の研修動画を制作し、全国からお申し込みいただいた約600名の方々に配信しました。本セミナーが、すべての子どもたちがそれぞれの個性や力を発揮しながら学べる環境づくりの一助となれば幸いです。



オンデマンドセミナー



ワークショップ (大塚)



展示教材の説明 (聴覚)



ワークショップ (桐が丘)

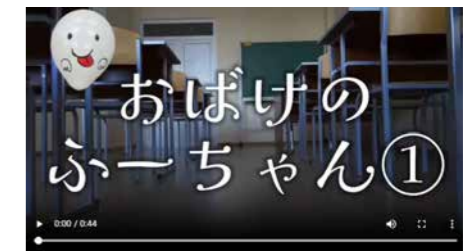
## 第5回教材・指導法コンテスト (木村賞 2024) の結果報告



木村賞  
「ドレミすごろく」  
附属視覚特別支援学校  
小学部図画工作科 佐藤直子



優秀賞  
「愉快的なアパート」  
附属聴覚特別支援学校 飯塚和也



優秀賞  
「おばけのふうちゃん「かげをつくろう」」  
附属大塚特別支援学校 古江陽子

ドレミすごろく <https://gakko.rdy.jp/kdb/search/kyozai/detail/638>  
愉快的なアパート <https://gakko.rdy.jp/kdb/search/kyozai/detail/632>  
おばけのふうちゃん「かげをつくろう」  
<https://gakko.rdy.jp/kdb/search/kyozai/detail/630>

第5回『教材・指導法コンテスト(木村賞)』が決定しました。受賞作品3点は上記の通りです。今年度の選考対象作品は53点で、うち25点が1次審査を通過、各学校管理職の先生、5附属連絡会議構成員の先生、障害科学域の先生による2次審査で7点に絞られ、呑海教育長、雷坂次長、梶山教育長補佐、篠塚先生の4名の先生の投票で「木村賞」1点、「優秀賞」2点が決まりました。木村賞を受賞した「ドレミすごろく」は、幼児児童が、触覚・聴覚・視覚(弱視児童)をもとにすごろくゲームに取り組み、構造や仕組みやルールを理解しながら数の概念・触察力・空間認知力を育むことをねらいに開発された教具です。詳しくは教材・指導法データベースからご覧ください。

なお、今回のコンクール終了時点で、教材数が660点になりました。提供していただいた先生方には心より感謝申し上げます。今後もデータベースの充実に努めて参りますので、ご協力くださいますようお願いいたします。

## 令和6年度 第6回5附属連絡会議について

附属特別支援学校5校では、年に7回、学習会や情報交換等を通じて、協働して得られた結果を全国へ発信する取組を行っています。1月9日(木)の会議は、附属視覚特別支援学校で、対面形式で行いました。

今回の学習会では、視覚特別支援学校で使用されている教材・教具などの紹介やシミュレーションゴーグルを使った弱視体験などを行いました。

また、附属視覚小学部重複学級と附属桐が丘との連携研究に関して、附属視覚特別支援学校重複学級に在籍する児童の事例について報告を行いました。他障害種の学校と、相互に連携を図ることの意義を再確認する大変有意義な時間となりました。



連携研究報告会



白杖を使った歩行体験



幼稚部の保育室

# editorial Postscript

編 集 後 記

卒業式のシーズンとなりました。この春、慣れ親しんだ学び舎を離れて新たな世界へと巣立つ子どもたちを前に、これまでの成長を見守り支えてこられた先生方も、それぞれに胸がいっぱいのことと思います。

本号の巻頭インタビューでは筑波大学人間系障害科学域准教授の丹治敬之先生に、「子どもだけではなく先生方も、周りの人を頼っていいのではないか。」と現場の私達に優しく温かいエールをいただきました。また、先生が仰るように、一歩引いてみることで、これまでとは違った新たな気づきが得られるのではないかと感じました。詳しくは、本号をご参照ください。

この3月で、私達、特別支援教育連携推進グループの大切な仲間の一人も教員生活からの「卒業」を迎えます。附属聴覚特別支援学校の美術の教員として長く教鞭をとってきた彼は、「SNE-T」を3年間担当し、一つひとつ思いをこめて表紙・デザイン、レイアウトを創り上げてまいりました。「SNE-T」のバックナンバーは、特別支援教育連携推進グループのHPからご覧いただけますので、お時間のある折にお目通しいただければ嬉しいです。

今年1年間、特別支援教育連携推進グループの活動を支えてくださった皆様に、この場をお借りして心より感謝を申し上げます。有難うございました。

竹田 恵

表紙「Peach Blossom」 筑波大学附属学校教育局

# SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット22号（通巻第70号）2025年3月20日発行  
発行 / 編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938

e-mail：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2024 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）